

「一つにする霊、聖霊」

サムエル記第二 9 : 1 - 8

June.8.2025

サムエル記第二 9 : 1 - 8 (パワポ)

Preface

聖書の始めの書物創世記を見ますと、ノアの時代、神様が洪水をもって人類をお裁きになったことが記されています。

その生き残ったノアの子孫たちは、「再び神様が、大水をもってお裁きになった時には切り抜けなければならない、生き残らなければならない」と、「頂きが天に届く塔を建てて名を上げよう」と主張しながら、神に反するかのよう

に高い塔を建て上げました。
こうして人は、主なる神様に従う道を選ばずに、神様に敵対するという愚かな選択をして行きました。

そんなバベルの塔を建てたノアに連なる人類に、神様が天罰をお与えになるのですが、その天罰というのが一見しますと、「どこが天罰なんだろうか？」と思えてしまうような、少し変わった天罰でした。

天から火が降ってくるわけでもなく、硫黄の池に投げ込まれるというようなものでもなく、再度の大洪水でもなく、人の言葉を混乱させるというものでした。

それまで世界の言語は、聖書に拠りますと、一つに統一されていましたが、神が全地の話し言葉を混乱させなされたために、人は意思疎通が上手く行かなくなってしまう。

様々な言語が登場し、様々な言葉に分かれ、言葉が通じないということは気持ちや心が通じにくいということだけでなく、色んな不便が生じるようになりますので、言葉が通じ合う者同士、言語が同じ者同士、地の全面に人々は散っていきました。

結果的に、言葉が、言語が通じませんので、人々の間に分裂が生じ、意思疎通が出来ない人とは敵となっていき、争い、葛藤し、戦争のようなことが起こり起こして行くようになってしまいました。

これが、聖書が私たちに教えて下さる教えです。

Part One

今日は、2000年前のエルサレムの五旬節・ペンテコステの日に集まっていた弟子たちに聖霊が臨み、聖霊に満たされ、それまで話すことも聞くことも出来なかった各国の言葉で、突如として、神の大きなみわざ・福音を語り出すという歴史的な事件を覚え祝うペンテコステ礼拝の日です。

人類の歴史を救済史、つまり、神の救いの歴史と見た時、大きな歴史的転換点となる一大事件が、このペンテコステの日に関わった聖霊降臨の出来事でした。

た。

そして、この出来事は、先程お話ししました創世記 11 章に書かれていますバベルの塔の事件とは、真逆の事件、真逆の出来事でした。

バベルの塔を建て上げるという事件は、神に敵対したゆえに、言葉が混乱し、言語が分かれてしまい、結果的に大きな争いを歴史の中で繰り返し続けるという人類の分裂の歴史の始まりのような事件でしたが、ペンテコステの日に聖霊様が人々に臨み、聖霊に満たされるという事件は、人と神が目に見える形で一つになるという事件であり、人同士が福音という一つの言語によって再び一つになる道が与えられたという、神の救済史史上最も大事な事件の一つでした。

聖霊が臨んで下さり、聖霊に満たされた人々に起こった最初に現れた神の賜物は、他国の色々な言葉で、神の大きなみわざ・福音を語り始めるという異言の賜物でした。

ペンテコステの祭りのために世界中からエルサレムに集まっていた人々は、旧約聖書が書かれたヘブル語ではなく、自分たちが生まれ育った国や地域の言葉で、神の福音が語られているのを聞いて、「いったいどうしたことか」と驚くのです。

そして、言語が違えど、福音という神の言葉ゆえに、互いに言葉が通じ合い始め、心や気持ちが通い始めました。

散り散りになっていた人たちが、一つ所に集まることに力を尽くし始めるようになるんです。

創世記 11 章のバベルの塔の事件で、悪い意味で鍵となる重要な言葉は、「散らされた」、「散って行った」、「散る」という言葉でした。

つまり、分裂です。仲間割れです。

ですが、ペンテコステの事件が記されている使徒の働きにおける重要な単語は、「みな一つになって」、「心を一つにして」、「一つにしてくださった」、「一つ」という言葉です。

使徒の働き 2 : 1 - 12 (パウロ)

使徒の働き 2 : 40 - 47 (パウロ)

「みな一つとなって、心を一つにして集まり、主は一つにしてくださった。」これが、ペンテコステの日に聖霊を受け、聖霊に満たされた人々、初代教会の姿でした。

先週のオープン礼拝は、アメリカの C C C で働きをされているトマス・ウィークリー先生が来て下さってメッセージを取り継いで下さいましたが、国が違い、言語が違えど、同じ福音が語られ、同じ福音を信じ、同じ福音にあって一つであることをあれることを、お会いして、メッセージを聞いて、直ぐに感じ

ました。

ロシアに行っても、マレーシアに行っても、メキシコに行っても同じでした。

言葉は通じないのに、一つの御霊によって、一つの福音の中で、一つの唯一の同じ神にあって、一つであることを感じ、一つになります。

以前、韓国の食堂で食事をしている時、サーブをして下さる店員の方の話し方や言葉から、「あれ、この方何か違うなあ」と感じて、「あのすみません。もしかして、教会に通っておられますか、クリスチャンの方ですか？」とお尋ねしますと、「そうです」と答えて下さったことが2、3度ありました。

不思議ですね。

同じ聖霊が内にいて下さっているからでしょうか、何か通じるものがあるんです。

最近ですと、妻が今、介護の初任者研修に参加しているのですが、講師の先生のお話を聞いていると、「この方、クリスチャンの方なのかな？」と思っていたところ、逆にその先生から、「土浦めぐみ教会の牧師夫人ですよ？ 私は、取手聖書教会の礼拝に出席させて頂いているクリスチャンです」と話しかけられてびっくりしたそうです。

今年の夏には久しぶりに、韓国大方教会とのコイノニアの交わりで、43名もの大人数の中高生とその先生方を迎えますが、その交わりの中でも、言語は違えど一つであることを直ぐに感じるでしょうし、25年間のコイノニアの交わりの中で、主にあって一つという格別の恵みをたくさん頂いてきました。

ホームステイをし、ホームステイを受け入れた時なんかは、それを如実に感じます。

日本語と韓国語で言葉は通じなくでも、同じ福音にあって、同じ聖霊にあって、同じキリストにあって、身ぶり手ぶりでも、直ぐに一つであることを感じます。

Part Two

聖霊は、私たちを一つにし、悪霊は、私たちを散り散りにします。

悪霊は分裂の霊であり、聖霊は一つにする霊です。

人が一つとなること、家族が一つとなり、教会が一つとなり、心が一つとなって、天の御国の共同体を形成し生きることこそ平和であり神の国のシャロームですが、この神にあっての平和ほど、人にとって重要な祝福はこの世に存在しません。

片や、私たちがこの地で生きている間、この地で受ける苦しみはとても多いと思いますが、経済的な困窮や困難も苦しみですし、病にかかったかかっている時も苦しみだと思いますが、人間が受ける苦しみの中で最も大きな苦しみは、分裂、分派だと思います。

一つになれないことこそ、苦しみですよ。

争い、妬み、憎しみ、欺き、喧嘩し、戦争し、殺し合うことが、イエス様が仰ったように、互いに、「ばか者、愚か者」と言い合うことが、人間が経験する、この地で経験する最も大きな苦しみだと言えるのではないのでしょうか。

聖霊は、私たちを平和にし、悪霊は、私たちを不和にします。

聖霊は私たちを一つにし、悪霊は私たちをズタズタに引き裂き、分裂へと導き、散り散りに争わせるのが、その仕事です。

そして、「この世の流れの支配者が、その悪い霊・悪霊だ」と、聖書は教えて下さいます。

第二次世界大戦・太平洋戦争以降、経済が発展し、科学技術が発達し、文化コンテンツが多岐に渡るといふ人が思い描いた豊かさを、日本を含めた世界は享受するようになりましたが、なおも変わらず、分裂分派の霊が支配しているかのようです。

新聞、テレビ、YouTube、町、地域、国々だけでなく、私自らが、私たち自らが、その分裂分派の霊に支配されているんじゃないかと思えてしまう程に、自分の正義感や自分の正しさに凝り固まって、自分を人に認めさせようとし、人を指導し、人に対して馬鹿にするような薄笑いを浮かべ、見下し、裁き合い、私たちには、一つになる一つにする霊が生まれながらにありません。

互いに敵対し合い、えぐり、ほじくり出し、倒し合い、戦争し、殺そうとする分裂の霊がこの世界を支配していますが、言葉では言い尽くせないほどに、どれだけ痛み、切ないことなのか分かりません。

Part Two

以前、こんなパロディー・コメディを耳にしたことがあります。

ちょっとグロテスクなのですが、ある人食い人種の子ども一人が、自分のお父さんとお母さんを食べてしまうんです。

そして食べた後、こう言いながら泣くんです。

「僕は親なしになってしまった！ 孤児になってしまった！」

「自分で食べてしまったのに、『悲しい』と泣くなんて、何と滑稽なコントなんだ」と思いますが、ここにも風刺があり、教訓、社会に訴える哲学のようなものがあるように思います。

互いに食べ合い、互いに争い、互いに殺し合って、その戦いに勝っていい気になったとしても、結局は、寂しい一人ぼっちとなって終わりを迎えるということですよ。

私たち人間は、本当に寂しい性だと思いますが、自分以外の人みなを友達にしようとするのではなく、敵にしようと、敵を作ろうとしてしまいます。

刺して、殺して、割って、踏んづけて、分裂して、後になってみると、みんな

な敵になってしまい、平和を忘れて、愛を忘れて、憎しみだけが残ри、怒りに満ちていて、そして、一人ぼっちです。

友がいません。

これこそ、私たち人間の最も愚かなところであり、また、サタンが付け入り、全神経を集中させて、虎視眈々と狙い伺っているところです。

ペテロの手紙第一 5 : 8 (パウロ)

と書いてある通りです。

もちろん、誰とでも和平、仲睦まじく、和やかなことが正しいわけでもなく、良いことでもないでしょう。

時には、血を流すまで戦わなければならない事柄があり、そういう対象もあったりすることでしょう。

イエス様も仰せになりました。

マタイの福音書 10 : 34 (パウロ)

「わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思っではいけません。わたしは、平和ではなく剣をもたらすために来ました。」

私は、この御言葉もとても大切な御言葉だと思っています。

太平洋戦争の多くの教会や教会指導者たちが、天皇崇拝や神社参拝を日本の文化だと受け入れ、日本式のキリスト教を作るんだと公言しながら戦うべきものと戦わずに、サタンと仲睦まじく、サタンの支配下にあるだろう事柄や人と仲睦まじくありながら、結果的に、士師記などに書かれているような主の目に悪であることを行い、それぞれが自分の目に良いと見えることを行いながら偶像と神をも見分けられない、見分けようとしない、戦うことをしない過ちを犯してしまったという反省の上に、今の日本の教会があるはずですが、果たして現代を生きる私たちはどうでしょうか。

救いのかぶとかぶり、御霊の剣、すなわち神の言葉を取って戦っているでしょうか。

信仰の創始者であり完成者であるイエス様から霊的に疲れ果ててしまわないよう目を離さずに、罪と戦って、血を流すまで抵抗しているでしょうか。

Part Three

今日最初にお読みました聖書箇所、第二サムエル記に登場してきますイスラエルの二代目王ダビデという方も、戦いの人でした。

ダビデの時代、現代以上に、露骨に、戦争はある面で経済活動そのものでありました。

この地上を生き抜く術でもありましたので、一国を導く王として戦争をせず

にはいられないような生涯だったと思います。

結果、ダビデは、その生涯に渡ってたくさんの戦争をし、たくさんの血を流しながら生きた信仰者・クリスチャンでした。

信仰者とかクリスチャンと言いますと、「えっ?!」とお思いになる方もおられるかもしれませんが、ある意味、私たちも同じだと思います。

残念ながら、先週もお話ししましたように、神の楽園エデンの園を追放された失楽園のようなこの世界を生きていく上で、私たちは、多かれ少なかれ、否応なしに戦いをしなければ生きられません。

デパートのバーゲンセール一つとっても、もし放出された備蓄米を手に入れたと思うならば、誰よりも早く並ぶという戦いから始めなければなりません。

ですが、ダビデは、戦争だけした人ではありませんでした。

戦争によってのみ、秩序を、平和を守ろうとした人ではありませんでした。

ダビデの素晴らしいところ、凄いと思うところは、戦って勝つことよりも、出来るならば戦わない方を選び、実際に、戦わずに勝った戦争の方が多かったということです。

ダビデという方を通して学ぶことのうちの一つは、「最高の勝利は、戦わずして勝つことだ」ということだと思います。

血を流さずして勝つことが、この世界にあっては、それでも最善の勝利だということを学びます。

ダビデはそれを求め、それが出来る人でありましたし、その重要性を知っていた方だったように思います。

私たちは、ややもすると、友でさえも敵にしていますが、ダビデという方は、敵をも友にしてしまう卓越した能力と言いましょか、信仰の人、神の愛に立とうとした信仰に立った人でした。

ダビデのことを力を尽くして殺そうとしたイスラエルの初代王サウルという方がいましたが、そんなサウルを、自分の身を守るためにダビデが危めることは正当防衛でしたし、不当なことではありませんでした。

もし実際に、ダビデがそんなサウルを殺してしまっても、当時の社会情勢や習わしにおいては何の問題も無ければ、むしろ「よくやった。これで、より良い王朝に変わる」と喜ばれるような事だったかもしれませんが、それでもダビデは決して、自分に対して不当な扱いをしてくるサウルを殺そうとはしませんでした。

むしろ、自分を殺そうと躍起になっていたサウル王が死んだ時には、衣を裂きながら哀痛しました。

そうして、イスラエルの2代目王となったダビデは、生き残ったサウルの家族を守ろうと、あちこち探りを入れながら、最後の最後まで力を尽くして探し出そうとし、ついに、サウルの最後の家族の生き残りであったメフィボシェテを探し出しました。

ついに、サウルの孫、親友ヨナタンの息子であったメフィボシェテを探し出すと、心から喜ぶんです。

そんなダビデの姿を見ていると、イエス様が話された失われた一匹の羊を探しに行く羊飼いの例え話が思い浮かぶと同時に、ダビデという方は、本当の意味で、真に、恵みを知る方だったんだなあと思わされます。

神の前にあって救われるに値するところなんか1mmもない、正しいところなんか一つも無い、邪悪な罪人でしかないことを良く分かっていて、それにも関わらず神の恵みゆえに生かされているということを、本当の意味でちゃんと分かっていた方なんだと思います。

ダビデという方の生涯をよくよく考えますと、「恵みを知る」ということの大切さ、「神の恵みを知っていく」というのが、神を信じるクリスチャンたちの人生なんだと思わされます。

「恵みを知ったならば、恵みをもって人に接していく」というのが、神を信じる者たちの歩みなんだと思わされます。

サウルの孫メフィボシェテは、お爺ちゃんサウルと父ヨナタンが戦死した時、乳母に抱っこされて逃げるのですが、誤って乳母が幼い彼を地面に落としてしまい、足が不自由になり萎えてしまいました。

王の孫であった身分から一夜にして、逃げ惑う身分へと転落してしまい、ダビデに見つかるまで、隠れながらひっそりと暮らしていました。

王が死んで王朝が代わりましたら、先の王朝の生き残った王族・家族は、根絶やし、皆殺しにされるのが当時の常識・常でしたので、ダビデ王がメフィボシェテを見つけ見つかった時にメフィボシェテは、「終わった」と震え上がりました。

ですがダビデは、そんなメフィボシェテに、「恐れることはない」と語り掛けながら、「あなたのお爺ちゃんサウル王の財産、土地の全てをあなたに返そう」と申し出るのです。

そればかりか、「あなたはいつも私の食卓で食事をすることになる」と語り掛けながら、メフィボシェテの王族としての身分まで回復させてあげるのです。

ダビデ王自身の家族と同じ扱いを、メフィボシェテに施すんです。

サムエル記第二 9：6－8（パワポ）

最後の審判という生まれながら御怒りを受けるべき子らとして生まれて来た私たちに施される神の愛、神の赦し、神の恵み、神の救いに与った者たちの姿を見るようです。

また、このダビデの姿こそ、真に、本当の意味で、神の恵みを知る者の姿なんだなあと思わされます。

Part Four

ダビデという方は、敵をも自分の友、自分の仲間にしてしまう恵みの人でした。

ある戦いにおいてダビデが導く隊が勝利し、たくさんの戦利品を手に入れた時には、ダビデと一緒に戦いに出て行った人の中に、「一緒に戦いに行かなかった奴らに、戦利品を分かち合うなんてことは出来ないし、しちゃんらない」と口々に言う人たちがいた中、ダビデはこう言ってすべての戦利品を皆で分かち合います。

「兄弟たちよ。主が私たちに下さった物を、そのようにしてはならない。主が私たちを守り、私たちを襲った略奪隊を私たちの手に渡されたのだ。ともに同じく分け合わなければならない。」(サムエル記第一 30 : 22 - 25)

また、自分の命を狙っていたサウル王が戦死した時、その遺体を丁重にもてなし、運び入れ、葬儀を執り行った村人たちには、「なんてことをお前たちはしたんだ!」というようなことは一切言わず、逆に、「よくやった!」と、その村人たちに厚い報償を与えました(サムエル記第二 2 : 5 - 6)。

ダビデという方は、自分の敵だった人たちをも自分の味方に作り変え、戦わずして勝利をなした人でもありました。

私たち人間には、先程のパロディ、食肉人種のようなDNAがあるように思います。

人をしきりに捕って食べようとする習性があります。

踏みつぶそうとし、かち割ろうとし、えぐりほじくり出そうとし、打ち倒そうとし、罵倒し、冷ややかな笑みを浮かべながら意地悪をし、売り渡し、色分けし、右と左に分かれ、私と少しでも違おうと追い込もうと、追い詰めようとし、します。

分裂分派の霊、悪い霊、悪霊に、その心を引き渡しているかのような、分裂分派の霊がこの世を支配しているかのようなのですが、愛する皆さん、主イエス様を愛する皆さん、主イエス様の愛を受けている皆さん、私たちは、聖霊の人ではありませんか。

ダビデは、確かに聖霊の人でした。

聖霊なる神様ゆえに、寛容の人でした。

私たちと同じように、まかり間違おうと、友でさえも敵にしてしまう罪人でありましたが、戦うべき時には戦い、戦うべきでない時には戦わないことを知っている聖霊様がお与え下さる分別力と御言葉に耳を澄まし、目を離さず、心を向けようとすることに熱心な聖霊の人として生きました。

Conclusion

「平和をつくる者は幸いです。その人たちは神の子どもと呼ばれるからです」というイエス様の御言葉のように、私たちは、信仰の創始者であり完成者であ

る主イエス様から目を離さずに、戦うべきものや相手としっかり戦いながらも、戦うべきでない事柄、戦うべきでない相手をしっかりと見極めながら、敵をも友とする聖霊の人でありたいと願うばかりです。

そうして、私たちがいる家庭、教会、職場、グループ、世界に、神の平和が成ることを願わずにはられません。

分裂分派の悪霊に従う私たちではなく、一つにする霊、平和をつくる霊、寛容の霊である聖霊の満たしを求めながら生き、恵みを、神の恵みを施す人でありたいと願います。

お祈りいたします。

祝祷：「私はその人に真実を尽くそう」、「私はその人に神の恵みを施そう」というダビデの言葉に生きられるよう導いて下さる主イエス・キリストの恵み、父なる神の愛、聖霊なる神の親しき交わりと満たしが、礼拝を献げた一人一人とともに、主イエスの御心に適ういのちあるすべての者たちとともに、世々限りなく、豊かにありますように。アーメン。